

Dictationに関する一考察

平野謙治

1. はじめに

書く活動は時間がかかるため、平素の授業の中では、なかなか取れず、家庭学習にまわすのが現状ではあるが、定期的に短時間でも書く活動を授業の中に位置づけることは大切ではないかと思う。書く活動の中には英語を聞いて書き取る、自分の言いたいことを3文程度で書く、文の内容を読み取って、それについて書くとか、あるいは従来行われている和文英訳等が考えられるが本稿では、書く活動の上で基礎的、基本的要素を多分にもつ「英語を聞いて、正しく書き取ること」を取り上げ、その中でも「書き取り」(dictation)に焦点をあてて、英語の総合力が測定できると言われるdictationの実践を基に、生徒の誤りの傾向やdictation活動の有効性について考察を加えていきたい。

2. dictationを取り上げた理由

筆者はここ数年、聞く、話す活動の一つとして授業の最初10～15分間かけてスピーチを行っている。毎時間2名の生徒がスピーチをし、それについて他の生徒がコメントを述べたり、質疑応答するというものである。そこで要求されるのは、話す力もちろんだが、まず、友達の話す英語を聞き取る力である。英語を聞き取ることができなければ、それに対する質問もできない訳である。この英語を聞き取る力をなんとか高めようと考え、短時間ででき、かつ書く力を養うことにもなるdictationを取り上げたのである。

また、書く力を養うことに関連して、学習指導要領の「書くこと」の指導事項は次のようになっている。

(ア) 文を聞いて正しく書き取ること。

(イ) 書こうとする事柄を整理して、大事なことを落とさないように書くこと。

(ウ) 書かれていることの内容を読み取って、それについて書くこと。

これらは、それぞれの学年目標に基づいて、言語活動を行うようになっているが、指導事項(ア)は「聞くこと」に関連して「書くこと」の指導の基本となっているものである。このような学習指導要領の目標に即して、現在行っている聞く、話す活動中心の授業に少しでも書く活動を取り入れ、書く力を養成したいと考え、dictationを試みた。

3. dictationについて

中学校で行われているdictationは、単語の書き取りや文章の一部分の空白をうめるという形のものが多いが、本来の意味のdictationは文章を書き取ることであろう。dictationが正

しく行われるには、一般的に次のような機能が必要とされる。1)

- 文を正しく聞き取れなくてはならない。
- 文字が正しく書けなくてはならない。
- 句読法が正しくなくてはならない。
- 書き取った文を見つめて、校正できる力がなくてはならない。

英語学習の初期の段階では、音声を通して学習をしていくことが自然であり、そのため、まず英語を正しく聞き取ることが要求される。dictationは、さらに聞き取った英語を正しく書けなければならないので、聞く力、書く力を養うのに有効な活動と言われている。また、比較的簡単に行えるし、学習した結果を自分自身で点検し、フィードバックできる利点もある。このように、以前は、広い教室では声の均一性が保証されないとか、それによって何が測定されるのかが明確でない等の理由で、テストとして良くないと考えられていたが、最近では、これが再評価されるようになった。2) また、Sutherland (1967) [Croft (ed.) 1972:224-231] はdictationの生む重要な効果として、スピーチの場合には強勢を置かれなければならないが、文法的にはきわめて大きな役割をもっている短い機能語の重要性を認識させることができる点を挙げている。3)

ところで、dictationを実施する際の留意点としては次のような点が挙げられる。4)

- (1) 英文の内容の中に固有名詞が多すぎないこと。
- (2) 英文の内容の中に数詞が多すぎないこと。
- (3) ポーズで区切った文節が短すぎないこと。
- (4) ポーズの置き場所が正確であること。
- (5) 発話速度を遅くしすぎないこと。

英文が生徒にとって、あまりにも難しいものであると意欲を失うことが考えられるので、学習者のレベルにあったもの、即ち同じレベルか、それ以下のものを選ぶことが大切である。また、意味の上でまとまりのある英文でなければならないのは言うまでもない。以上のような点に留意してdictationを行えば、聞く力、さらには書く力の育成につながるものと考えられる。

4. dictation 活動の実際

(1) 方 法

この活動は、昭和62年度本校第2学年を対象に、昭和62年9月より昭和63年1月までの間、実践してきた。dictationには、初歩的な段階としては語や句を書き取らせる方法がある。また、まとまりのある文を書き取らせる方法、文の一部を書かせるspot dictationなどもあるが、ここでは、比較的手軽に行うことができ、本来の意味のdictationである文章を聞いて、それを書き取るという方法を取った。初めは基本文型等の一文を書き取らせ、慣れてきた頃に、まとまりのある内容の英文3つぐらいを書き取らせるようにした。一文の場合は、あまり長くない文を1回だけ普通の速さで言ったものを書き取らせた。そして、3文程度の文章を書き取る際には、次のような方法に従って行った。

- ① 英文は自作のものや他社の教科書、ヒアリング教材から採用する。

Dictation に関する一考察

- ② 意味を伴った dictation にするため英文と共に意味も書かせる。
- ③ 授業の終わりのところ 5 分を使って、毎時間行う。
- ④ どこか間違ったか自分で確かめるため自己採点する。

英文を書き取らせる場合、一般的には 3 回読み上げるのがよいとされているが、筆者も下記のような方法に従って行った。1)

回数	読み方	生徒の活動
1 回目	自然な速さで読む。	英語を聞いて、全体のあらましを理解する。
2 回目	意味的な区切りにポーズをとってゆっくりと読む。	英語を聞いて書き取る。
3 回目	1 回目よりやや遅い程度の速さで読む。	2 回目の読みで書けなかった所を補う。 全体を見直す。

(2) dictation に使った英文例

どういった英文を書き取らせるかが問題になってくる訳だが、この活動を始めた当初は教科書に出てきた重要な文、基本文型、日常よく使う表現、あるいは意図的に同化 (assimilation) や数詞が含まれている文等を選んだ。およそ 10 回ぐらい 1 文で行い、次に 3 文の書き取りへと進んで行った。3 文の場合は、先にも述べたように自作のものや他社の教科書、ヒアリング教材から取ったものを使った。次に実施した例文を数例挙げてみる。

① 1 文の例

- 例 1 What did you do after dinner yesterday ?
- 例 2 We are going to get up at seven tomorrow morning.
- 例 3 I went to the store to buy some oranges.
- 例 4 Nairobi is one of the most modern cities in Africa.
- 例 5 It takes about an hour by car.

② 3 文の例

- 例 6 I am in New York now. I'm staying in a hotel with my father and mother. We came here three days ago.
- 例 7 Sam went to a shop yesterday. He bought thirteen apples there.
Some of them were not good.
- 例 8 Sam is one of my friends.
I'm running in the park with him.
There are thirty boys in the park.

(3) dictation における誤りについて

① 動詞の変化の誤り

例えば、例 6 の staying の ing を落としている生徒が 179 名中 133 名 (74.3%) もいた。これには次のような理由が考えられる。

- ア、ing にはストレスが置かれなため。
 - イ、native speaker のかなり速い発話だったため。
 - ウ、書いたものを見直し校正する力がなかったため。
 - エ、次の in a と発音が似ていたため。
- テストの後に書いた生徒の感想を見てみよう。

I'm staying in～のところが ing と in がいっしょに聞こえて、困っていたので ing をぬかしてしまった。考えてみるとまちがった文は動詞と be 動詞がかさなるわけないからへんだなあと思った
A子

A子の場合、I'm stay in～と書いており、この種の誤りは他に77例見られた。そして、A子と同じ感想を書いていた生徒が9名いた。動詞の語尾は日本語にする際にも重要なところだが、見直して校正すれば、この種の誤りはかなり防げると思う。A男のように校正をしっかりとやっている生徒もいた。

2番目の staying の ing のところがよく聞こえなかったので、前後の文の内容から文を考えた。ここが難しかった。
A男

② 冠詞の誤り

例7の a shop の a を落としている例が79例(44.9%)見られた。a や the のような冠詞は文中でストレスがないため軽く読まれるので聞き取りにくい。同じことは例4の an hour でも見られた。この場合は about an hour の同化 (assimilation) による発音の変化によって非常に聞き取りにくくなる。

- ・読むスピードが速いと a か the が分かりにくい。 B子
- ・a と the がはやくて、はっきりしないのでよく分からなかった。 C子
- ・早口でわからなかった。アンアワーもアナワーって聞こえたし、テイクスアバウトもテイクサバウトに聞こえた。 D子

D子のように一つ一つの単語の発音は聞き取れても、それが連なって同化作用が起こってくると全く聞き取れないという生徒が大多数である。勿論、生徒だけでなく我々教師を含めたすべての日本人学習者にとっての学習上の困難点であると思う。これを克服するには、やはり dictation や listening を通して速い英語に慣れていくことが大切である。

③ be 動詞の誤り

be 動詞もよく聞き落とされるものの一つである。例7の were の誤りは176例中151例(85.8%)も見られた。特に were を are (9例) や a (12例) と聞き取っていたものが目立った。Some of them were not good. の文は、全体的に難しかったようで完全に書けた生徒はわずか19名しかいなかった。従って、were の所が書けなかった生徒がほとんどで、are や a が書けた生徒はまだよい方であった。そして、なかには some of them と連

語のようにして覚えていた生徒も数名いた。

were が are に思えた。でもよく考えてみれば、1、2の文で3も過去形の文だということが分かったはず…… E子

ここでも be 動詞は弱く読まれるため、見直しの段階で校正をしっかりとしなければならないことが分かる。また、耳だけにたよって、書き取っていくと上のような誤りが出るので、文章全体の意味を考えていくことが要求される。

④ 数詞の誤り

一般に数詞が多すぎると書き取りが難しくと言われるが、文章の中に一つだけ入れてテストしてみたところ、thirteen を thirty と聞き取った例が 176 例中 65 例 (36.9%) 見られた。この二つは単独で発音されても聞き分けることが難しいが、文章中だとさらに難しくなるようだ。特に大きな数になるとさらに聞き取ることが困難になってくる。数詞の読み方については十分なドリルが必要であり、また日常の会話のなかに意図的に数詞を入れて指導することも大切だと思う。

⑤ 前置詞の誤り

冠詞や be 動詞同様、前置詞も文中でのストレスがないため聞き落としやすい。例 6 I'm staying in a hotel ~ の in を落としした例は 179 例中 71 例 (39.7%) もあった。

2 文目で staying in a というのが似ているのが続いていてよく分からなかった。in というのは速く言われるとよく分からない。 F子
 2 番目の in a の所が聞き取りにくくて書けなかった。in と a をいっしょによんでいるのがきつと分からなかったんだと思う。 G子
 とにかく外人さんの声ってとても聞き取りにくいんですよ。in a もイナって聞こえるし ……… H子

in a がイナのように発音したりするのは、普段の授業の中でも行っている訳だが、聞き取るとなるとまた違って来るようである。文全体をゆっくり読む習慣がつくと normal speed で読まれた時に全く違った音に聞こえてしまうので、一文一文は出来るだけ normal speed に近づけたい。また、ing と in という似た音が続いたため混乱した生徒も多かったようだ。この文は全文が長かったこともあって正解者はわずか 8 名しかいなかった。

⑥ 代名詞の誤り

代名詞も当然弱く読まれるので、聞き取りにくいものの一つである。例 7 Some of them ~ の them の誤りは 176 例中 64 例 (36.4%) あった。特に多かった誤りは them を then と書いていた例が 64 例中 31 例も見られた。発音が似ているためもあるが、これも校正しかりすれば防げる誤りである。

Some of them とかいうのは、そういうつづきのことばを覚えてなかったからできなかったと思う。 I子

some of themなどはよく使うことばなので、覚えていたから、すぐ書けた。 J子
some of themなどは連語なので迷わなかった。 K子

J子やK子のように some of them を連語のようにして覚えてしまっている生徒と I子のように覚えていない生徒では大きな差が出てくる。そして、そのような言い方に慣れない生徒は、some を Sam と聞き取り、次のことばが出てこなくなってしまうようだ。

⑦ 複数形の誤り

例7の apples の s を落とした例は 176 例中 31 例 (17.6%) あった。次に there があり、聞き取りにくいにもかかわらず比較的少なかったのは、apples の前に thirteen があって、ある程度校正ができたためと思われる。

……数を考えて s とか were をつかわないといけないと思った。 L子
apple の s をききとれなかったのかも知れないけど、文を見れば分かっていたのに見ていなかった。 M子

(4) dictation に見られる生徒の変容

次に昭和 62 年 9 月より昭和 63 年 1 月までの間、dictation 活動を通して生徒がどのように変容していったかを S 62 年 9 月と S 63 年 1 月に実施したテスト及び生徒の感想を通して見ていきたい。

・ S 62 年 9 月実施のテスト

- ① { I'm in New York now.
I'm staying in a hotel with my father and mother.
We came here three days ago.
- ② { Sam went to a shop yesterday.
He bought thirteen apples there.
Some of them were not good.

・ S 63 年 1 月実施のテスト

- ③ { Sam is one of my friends.
I'm running in the park with him.
There are thirty boys in the park.
- ④ { I saw a big dog in the garden.
It had black eyes.
It was digging a hole.

表 1.

誤り	S 62 年 9 月実施のテスト		S 63 年 1 月実施のテスト	
(1)動詞の変化	① I'm <u>staying</u> in ~	133 例	③ I'm <u>running</u> in ~	22 例
(2)冠 詞	② Sam went to <u>a</u> shop ~	79 例	④ I saw <u>a</u> big dog ~	18 例
(3)be 動詞	② Some of them <u>were</u> ~	151 例	③ There <u>are</u> ~	8 例
(4)数 詞	② ~ <u>thirteen</u> apples ~	65 例	④ It <u>was</u> digging ~	16 例
(5)前 置 詞	① I'm staying <u>in</u> a ~	71 例	③ ~ <u>thirty</u> boys ~	47 例
(6)代 名 詞	② Some of <u>them</u> ~	64 例	④ ~ <u>in</u> the garden.	17 例
(7)複数形の s	② ~ <u>thirteen apples</u> ~	31 例	③ ~ with <u>him</u> .	15 例
			④ <u>It</u> had black eyes.	12 例
			③ ~ <u>thirty boys</u> ~	3 例
			③ ~ <u>my friends</u> .	27 例

2つのテストの間に約40回の dictation を積み重ねてきた。1・2回のテストで断定することは難しいが、おおまかな変容の様子はうかがえると思う。表1に示したように、それぞれの項目において誤りが少なくなっている。これは、一つには見直して校正をするようになってきたこと、また dictation に慣れてきたということが挙げられると思う。テスト後の生徒の感想を見てみよう。

一度聞いて内容をつかんでから書いて、その後確かめることができるので、まちがえることが少なくなったように思う。thirty がきちんと聞き取れてよかった。 N子
耳がすっかりなれてしまって、よくききとれてうれしい。外国人の英語もわかり出した。 O子
はじめてヒアリングテストをやった時よりとても聞き取りやすくなった。やっぱり声に出してみたり、だいたい場面を想像してやるとよくわかるようになる。 B男

このように「前に比べ、よく聞き取れるようになった。」という感想が多かった。このことは同時に英語を集中して聞くようになったことへもつながっていったように思う。しかし一方では thirty と thirteen、are と were、has と had、they と there 等の区別がしにくいとか one of 等の発音が聞き取りにくいという感想もあった。

小さく発音するところなんかきこえなくて、意味もわからなくてこまった。a と the とかもまちがえやすいから気をつけよう。 P子

また、聞き取れてはいるがつづりのミスがあり正解にならない生徒がいる。例えば、表1の動詞の変化の項の③は22例中15例、また数詞の項の③は47例中24例がつづりのミスであった。これらの生徒達は誤りを通してつづりを正確に書くことに注目し始めた。

今日はなかなかよく聞き取れていた。thirty でつづりに迷ったので、単語をしっかり覚えたいです。 Q子
つづりはとっても大切ですネ。これが命とりにならないうちにもう一度見直したい。 C男

この他、dictation を始めた当初は、校正をすれば防げた誤りが多く見られたが、書き取りと共に意味も書かせたため、多くの生徒たちが意味にも注意を払い、校正していくようになった。

もっと文全体を見て、文脈を考えて書かなければならないと思った。 D男
……それから日本語にする時に最後の終わり方に要注意。している。した。する。などよく読み取ること。 R子
It had の had を最初 have とかいていたが前の文と後の文は両者とも過去形なので had となおした。had や have はびみょうだから難しい。 E男

和訳の際に終わり方が曖昧になることが多いが、R子のように普段なにげなく使っている日本

語にも目を向けるようになり、訳す際の注意すべき点に気づくようになった。

5. ま と め

dictation 活動を行ってきて、感じたことをいくつか述べてみたい。一つには英語を聞く際に集中して聞くようになったことである。書き取る際には一字一句洩らさず書かなければならないので、どうしても集中せざるを得ない。例えば、thirty と thirteen の違いは文脈から類推する訳にいかないため耳にたよるしかない。従って、集中して聞いていないと書き取れないことになる。

二点目は英語らしい音に慣れてきたことである。即ち、one of とか in a 等同化作用による音の変化に慣れ、of とか a のような細かい点を聞き落とすことが少なくなってきた。読む際には one of をワノブのように読むが、いざそのように言われたのを聞き取るとなると出来ないことが多かった。しかし、dictation を重ねることによって one of のように続けて読まれる音にも慣れてきたように思う。三点目は当初聞いて、そのまま書き取ることによって精一杯だったが、徐々に内容に注意を向けるようになったことである。そして、文章全体のおおまかな内容を把握し、それを書く時の参考にするようになった。四点目は校正を通して文法的に細かい点を見直すようになったことである。生徒の感想を見ると「前後の文を見れば分かったのに……」という感想が多かったが、徐々に反省を生かしていくようになり、文法的に自分でチェックできるようになった。最後に、dictation は文の最初、即ち初めの一文が聞き取りにくいということがこの活動をしていて分かった。これは特に学力下位群にそういう傾向が見られた。第一文でおよそ何について言っているのかつかまなければならぬが、それが出来ないため、文全体の内容もつかむことが難しくなってくる。このように dictation 活動は手軽に行え、かつ聞く、書く両面の力を伸ばすことができる有効な活動と言える。

今後の課題としては、一回で聞き取る範囲を長くすることである。そのためには、今までは一文を意味の上の区切りで切って読んでいたが、区切らないで通して読んでみることもいいと思う。また、三回読んでいたところを二回だけで終え、できるだけ一回で聞き取らせることも考えられるだろう。今後は、これらを実践することによって、聞く力、書く力をさらに伸ばしていきたいと思う。

〈参考文献〉

- 1) 鈴木忠夫編：「言語活動を生かした授業」書くこと、開隆堂、昭和 58 年
- 2) 土屋澄男著：「英語指導の基礎技術」、大修館書店、1985
- 3) 垣田直巳編集：「英語教育学研究ハンドブック」、大修館書店、1982
- 4) 萬谷隆一著：「何をどのようにテストするか 14」、開隆堂、英語教育、(8)1987
- 5) 佐々木輝雄他：「外国語の主體的・協力的授業」、ぎょうせい、昭和 56 年